

大学生男女の職業的階層志向の違いと その背後にあるもの

多喜 弘文

TAKI Hirofumi

1 はじめに

社会階層論において、高い階層をめざす「階層志向」についての研究がある。論者によって呼び方はさまざまであるが、この階層志向は継続的に検討が加えられてきた意識である。階層志向に関する先駆的な研究としては、安田三郎（1971）や門脇厚司（1978）による実証研究が重要だろう。安田は、日本社会における職業的上昇志向（アスピレーション）である立身出世主義について、概念的・実証的に検討を加えた。また、門脇は、人びとが出世に対して否定的なイメージを抱きつつも、出世をめざしていないわけではないことを示した。これらの研究の焦点は、上昇志向としての立身出世と社会移動の関係を検討することであった。

その後、階層志向についての研究は、社会移動にかかわる意識としてではなく、価値意識としての側面に重点をシフトさせていく。研究の焦点が「豊かな社会における階層志向のありよう」に移動していくのである。議論の中心は「脱階層的な価値観」というものである。この問題についてのさまざまな議論を概括的にまとめると、「脱階層的な価値観の存在は認められるものの、階層志向は根強く存在している」ということと、「階層志向は地位属性と関連しているが、脱階層志向的な価値観と地位属性の関連は明らかではない」ということになると思われる（片瀬 1988、片瀬・友枝 1990、今田 2000、井上 2000）。

ところで、階層志向についての研究には、まだ検討されていない大きな問題が存在する。それは、女性の階層志向という問題である。上にあげた先行研究は、いずれも女性の階層志向を正面から取り上げてはいない。女性の職業アスピレーションについては、性役割観やライフコース観など、女性に特有の条件との関係でこれまでも論じられてはいる（中山 1985、吉原 1995、片瀬 1997、中西 1998、元治 2004 など）。しかし、それらの研究が今までの階層志向の研究とどういう関係にあるのかということとは定かではない。

現代の日本社会において、女性が働くことが以前と比べて一般化していることは明らかである。少なくとも、「高学歴女性であっても多くは、卒業後、就業しないまま結婚し家庭に入るか、就業するとしても、結婚を予期した上での数年間のみ就業」であり、「職業生活を自己の人生の主要期間にわたった前提としない」（中山 1985: 65）という認識を、現代の女性にそのままあてはめることは適切ではないであろう。このような社会の変化を踏まえるならば、女性の（婚姻などによらない）個人的階層志向、すなわち「職業的階層志向」についても検討すべきであろう。

以上の問題意識から、本稿では女性の職業的階層志向について検討する。分析の焦点は、男女それぞれでのさまざまな意識と職業的階層志向の関係を明らかにすることに置かれる。現代の日本社会において、どのような意識をもっている人が高い階層を目指すのか。男性と女性ではその意識に

何か違いはあるのか。違うとするならば、それはどのように異なっているのか。そして、なぜ異なっているのか。本稿ではこれらのことを検討する。

男性と女性の職業的階層志向について同じ条件のもとに考えるために、分析では、就労への準備段階にある大学生の男女のデータを用いるのが都合がいい。そこで、今回は、筆者らが2005年10月に同志社大学の社会学専攻に所属する全学生を対象におこなった「大学生の社会的適応」調査(N=299、男127女168、回収率76.9%)のデータ²⁾を用いることにする³⁾。したがって、厳密に言えば、本稿でおこなうことは女子大学生の職業的階層志向の(男性と比較した場合の)特徴について明らかにすることである。

2 職業的階層志向と就業意識の関係

2.1 職業的階層志向尺度の構成

まずは、職業的階層志向をはかるための職業的階層志向尺度を構成しよう。尺度を構成する変数として、「次にあげることは、あなたにとってどの程度重要ですか」という質問に対する「高

い収入を得ること」「高い地位につくこと」という項目と、「あなたが仕事をする上で、次のような事柄はどれくらい重要ですか」という質問に対する「社会的評価の高い職業につくこと」という項目について、それぞれ5段階で回答してもらったものを使用する。その3変数について主成分分析をおこなったものが表1である。

表から、3変数とも第1主成分に対して共通に高く負荷することが分かる。よって、これらの3変数を元に職業的階層志向尺度を構成することが適切であると判断し、この第1主成分の主成分得点を以後の分析では職業的階層志向尺度として用いることにする⁴⁾。

2.2 常勤志向・希望企業規模

ではさっそく職業的階層志向と就業意識の関係を見ていこう。ここでは常勤志向や希望企業規模と職業的階層志向の関係を検討する。職業的階層志向が高い人ほど、常勤として働くことや大企業で働くことを重視しているのではないかと考えられるが、それは男女両方に当てはまることだろうか。まずは常勤志向と職業的階層志向の相関を見たものが表2である⁵⁾。

表2より、男女両方において、職業的階層志向が高いほど常勤につくことを重視していることが分かった。

次に職業的階層志向と希望企業規模の関係について見てみよう。「大企業(1000人以上)」「中企業(500~1000人未満)」「小企業(500人未満)」の3つの企業規模について、就きたい順に順位づ

表1 職業的階層志向変数の主成分分析

項目	第1主成分
高い収入を得ること	.813
高い地位につくこと	.870
社会的評価の高い職業につくこと	.757
固有値	1.991
分散寄与率(%)	66.4
サンプル数	296

表2 職業的階層志向と常勤志向の相関分析

項目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
常勤の職業につくことは、自分自身にとって重要である	0.394**	(126)	0.405**	(165)
卒業後、自分はパート・アルバイトとして働いてもよい	-0.200*	(126)	-0.305**	(164)

**p<0.01 *p<0.05

けをしてもらったものを使用して分析をおこなう。表3は、3つの企業規模のうち1番に選ばれたもの（「中企業」と「小企業」は合併して「中・小企業」とした）と、職業的階層志向を3分割して職業的階層志向「高」「中」「低」としたものとクロス表である。

表3より、男女両方において、職業的階層志向が高いほど大企業を志向する割合が高いということが分かった。

表3 職業的階層志向3分割と希望企業規模のクロス表

性別	階層志向	大企業	中・小企業	合計(N)	χ^2 値
男	高	72.3	27.6	100.0(47)	6.738*
	中	50.0	50.0	100.0(32)	
	低	47.8	52.2	100.0(46)	
	合計	57.6	42.4	100.0(125)	
女	高	79.3	20.7	100.0(58)	28.141**
	中	46.3	53.7	100.0(54)	
	低	30.2	69.8	100.0(53)	
	合計	52.7	47.3	100.0(165)	

**p<0.01 *p<0.05

2.3 仕事をする上での重視点

職業的階層志向が高いほど常勤・大企業志向であり、この点については男女に同じ傾向が見られた。では、他のさまざまな職業意識についても違いはないのだろうか。いくつかの変数について検討していく中で、われわれは「仕事をする上での重視点」という興味深い変数に出会うことになる。表4は「あなたが仕事をする上で、次のよう

な事柄はどれくらい重要ですか」という質問に対するいくつかの項目と職業的階層志向の相関について見たものである。

男女での結果が大きく異なっているということが表4からは読み取れる。男性の職業的階層志向とそれぞれの項目の相関はすべて有意ではないが、女性では、いずれの項目との間にも有意な相関が見られる。女性では、職業的階層志向が高い人ほど「自分で行動が決定できること」「自分で何かをつくり出すことができること」「充実感が得られること」「時間に拘束されないこと」といった、仕事をする上での自由度ややりがいを重視する傾向があるようだ。

3 職業的階層志向と希望家族モデルの関係

男女間で職業的階層志向に関連する職業意識が異なることが分かった今、さらに範囲を広げて検討を進めることにしよう。ここではまず、自分の将来の家庭についての意識と職業的階層志向の関係について検討することにする。職業的階層志向が将来の地位に対するアスピレーションである以上、将来どのような家庭を築きたいかというイメージとも関連していると考えられるからである。具体的には、将来結婚したいかどうかについての「結婚希望意識」、子どもが欲しいかどうかについての「子ども希望意識」、自分が結婚すると仮定した場合に望ましいと考える夫婦の就業形態についての「希望夫婦就業形態意識」と職業的階層志

表4 職業的階層志向と仕事をする上での重視点との相関分析

項目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
自分で行動が決定できること	0.054	(126)	0.281**	(166)
自分で何かをつくり出すことができること	0.048	(126)	0.229**	(166)
充実感が得られること	0.149	(126)	0.178*	(166)
時間に拘束されないこと	0.055	(126)	0.230**	(166)

**p<0.01 *p<0.05

向との関係を見ていくことにしよう。

3.1 結婚希望意識

最初に結婚希望意識と職業的階層志向の関係について分析しよう。表5は「あなたは将来結婚したいと思いますか」という質問に対する回答と職業的階層志向3分割のクロス表である。なお、「結婚したくない」と「どちらともいえない」の 카테고리を選んだ人は少なかったため、これらのカテゴリーを「結婚したくない・どちらともいえない」という1つのカテゴリーに統合した。

表から、男性では結婚したいと考える人の割合が職業的階層志向の高い方から順に、85.4%、

65.6%、60.9%と下がっているのが読み取れる。一方、女性では職業的階層志向「中」と「低」で結婚したいと答える人の割合が変わらないことが分かる。

以上の結果から、男性では職業的階層志向が高いほど結婚をしたいと考える傾向があるが、女性では職業的階層志向の高さと結婚希望意識との関連があるとはいえないと判断できる。

3.2 子ども希望意識

次に、将来子どもが欲しいかどうかということについての「子ども希望意識」と職業的階層志向の関係について見てみよう。表6は、「あなたは

表5 職業的階層志向3分割と結婚希望意識のクロス表

性別	階層志向	結婚したい	結婚したくない どちらともいえない	合計(N)	χ^2 値
男	高	85.4	14.6	100.0(48)	
	中	65.6	34.4	100.0(32)	
	低	60.9	39.1	100.0(46)	
	合計	71.4	28.6	100.0(126)	
女	高	91.4	8.6	100.0(58)	7.643*
	中	83.3	16.7	100.0(54)	
	低	83.3	16.7	100.0(54)	
	合計	86.1	13.9	100.0(166)	

* $p < 0.05$

表6 職業的階層志向3分割と子ども希望意識のクロス表

性別	階層志向	欲しい	欲しくない どちらともいえない	合計(N)	χ^2 値
男	高	83.3	16.7	100.0(48)	
	中	68.8	31.3	100.0(32)	
	低	63.0	37.0	100.0(46)	
	合計	72.2	27.8	100.0(126)	
女	高	78.9	21.1	100.0(57)	5.078†
	中	88.2	11.8	100.0(51)	
	低	83.3	16.7	100.0(54)	
	合計	83.3	16.7	100.0(162)	

† $p < 0.1$

表7 職業的階層志向3分割と希望夫婦就業形態意識とのクロス表

性別	階層志向	夫のみ働く 夫が主に働く	夫婦とも 同じ程度に働く	妻のみ働く 妻が主に働く	合計(N)	χ^2 値
男	高	77.1	18.8	4.2	100.0(48)	7.614*
	中	67.7	32.3	0.0	100.0(31)	
	低	50.0	45.2	4.8	100.0(42)	
	合計	65.3	31.4	3.3	100.0(121)	
女	高	45.5	54.5	0.0	100.0(55)	5.664†
	中	64.7	35.3	0.0	100.0(51)	
	低	65.4	34.6	0.0	100.0(52)	
	合計	58.2	41.8	0.0	100.0(158)	

注) χ^2 値は「妻のみ働く・妻が主に働く」を除外したクロス表をもとに計算

* $p < 0.05$ † $p < 0.1$

将来、子どもが欲しいですか」という質問に対する回答と職業的階層志向3分割とのクロス表である。先ほどと同じく、「欲しくない」と「どちらともいえない」は「欲しくない・どちらともいえない」という1つのカテゴリーとして統合した。

表より、男性で子どもが欲しいと答える人の割合は、職業的階層志向が高い方から順に83.3%、68.8%、63.0%と下がっていく傾向がある。一方女性では、職業的階層志向が高い方から順に78.9%、88.2%、83.3%と一貫した傾向が見られない。

以上の結果から、男性では職業的階層志向が高いほど子どもが欲しいと答える傾向が見られるが、女性では関連は見られなかったと判断できるだろう。

3.3 希望夫婦就業形態意識

最後に「希望夫婦就業形態意識」と職業的階層志向の関係を見ることにする。表7は、「あなたが結婚するとして、夫婦の就業形態は下のどれが望ましいとお考えですか」という質問に対する回答と職業的階層志向とのクロス表分析である⁶⁾。

まずは男性から見ていこう。男性では「夫のみ働く・夫が主に働く」を選択した人の割合を職業

的階層志向が高い方から低い方に順に見ていくと、77.1%、67.7%、50.0%と下がっていることが読み取れる。「夫婦とも同じ程度に働く」の望ましいとした人の割合は、同じく職業的階層志向が高い方から順に見ていくと18.8%、32.3%、45.2%と上がっている（「妻のみ働く・妻が主に働く」を選択した人は2人しかおらず、そのカテゴリーを省いて計算した）。以上の結果から、男性では職業的階層志向が高いほど自分が主に働く、もしくは自分のみが働くという夫婦就業形態を志向しているといえるだろう。

次に女性の結果を見てみよう。「夫のみ働く・夫が主に働く」を選択した人について順に見ていくと、45.5%、64.7%、65.4%と職業的階層志向が低いカテゴリーにいくにしたがって割合が上がっていている。一方「夫婦とも同じ程度に働く」を選択した人の割合は、54.5%、35.3%、34.6%と下がっている。以上のことから、女性では職業的階層志向が高いほど夫婦が同じ程度働くという夫婦就業形態を志向する傾向があるといえるだろう。

4 職業的階層志向と価値観の関係

将来の家族についての意識と職業的階層志向の

表 8 職業的階層志向と基本的価値観の相関分析

項 目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
人のためにつくすこと	0.348**	(126)	0.092	(166)
社会に貢献すること	0.327**	(126)	0.009	(166)
趣味に没頭する時間を多く持つこと	-0.066	(125)	0.252**	(164)
趣味に打ち込むこと	0.041	(126)	0.261**	(166)
余暇を楽しむこと	0.075	(126)	0.220**	(165)
やりがいのある仕事につくこと	0.095	(126)	0.231**	(165)

**p<0.01

関係を見ていく中で、これらの意識についても男女で職業的階層志向との関係に大きく異なった傾向が見られることが明らかになった。このことは、職業的階層志向の社会的な意味が男女にとって異なっていることを示しているといえるだろう。

そこで、さらに検討範囲をさまざまな価値観と職業的階層志向の関係にまで広げることにしよう。職業的階層志向が男女に対してもつ社会的な意味が異なる以上、それと関連する価値観にも男女で違いがあるかもしれないからである。実際、2.3 では、仕事において重視する点と職業的階層志向との関連の仕方が男女で異なっていた。仕事に関連する意識だけではなく、より一般的な価値観と職業的階層志向の関連を男女で見ていくのがここでの目的である。

4.1 基本的価値観

まずは職業的階層志向と基本的な価値観の関係である。「次にあげることがらは、あなたにとってどの程度重要ですか」という質問に対する「人のためにつくすこと」「趣味に打ち込むこと」「余暇を楽しむこと」「やりがいのある仕事につくこと」という項目や、「あなたは、これからの自分や生き方についてどのようにお考えですか」という質問に対する「社会に貢献したい」「趣味に没頭する時間を多くもちたい」という項目と職業的階層志向との相関分析をおこなったのが表 8 であ

る。

表 8 から、職業的階層志向との有意な相関がある価値観の項目に男女で大きな違いがあるということが分かる。男性では、職業的階層志向が高いほど「人のためにつくすこと」「社会に貢献すること」を重視している。女性では、職業的階層志向が高いほど「趣味に没頭する時間を多く持つこと」「趣味に打ち込むこと」「余暇を楽しむこと」「やりがいのある仕事につくこと」を重視している。この「やりがいのある仕事につくこと」と女性の職業的階層志向との正の相関は、職業的階層志向が高い女性ほど仕事をする上での自由度ややりがいなどを重視するという 2.3 での分析結果とも整合的であるといえるだろう。

職業的階層志向との相関が見られる項目は男女で一つも重なっておらず、相関があった項目の意味も大きく異なっている。やはり、男性と女性では職業的階層志向と関連する価値観は大きく違っているようだ。そこで、どのように違うのかということについて、ここで見られた違いをもとに、もう少し詳しく見ていくことにしよう。

4.2 余暇活動

前項では、職業的階層志向が高い女性ほど余暇や趣味を重視する価値観をもっているということが分かった。ところで、その職業的階層志向の高い女性は、実際に余暇活動を普段から活発におこなう傾向があるのだろうか。また、おこなう余暇

表9 職業的階層志向と余暇活動および余暇活動総合スコアとの相関分析

項 目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
ゲームをする	-0.097	(114)	0.040	(143)
音楽を聴く	-0.020	(118)	0.043	(154)
読書をする	-0.110	(120)	0.188*	(157)
映画をみる	-0.066	(115)	0.120	(155)
マンガを読む	-0.096	(115)	0.144	(153)
ギャンブルをする	-0.009	(111)	0.106	(141)
スポーツをする	0.074	(115)	0.070	(148)
習い事	0.075	(110)	0.043	(145)
ショッピングをする	0.087	(117)	0.193*	(162)
ライブ、コンサートに行く	-0.092	(113)	0.025	(145)
演劇を見に行く	0.066	(109)	0.008	(145)
美術館、博物館に行く	0.021	(111)	0.179*	(151)
海外旅行をする	-0.193*	(110)	0.070	(150)
国内旅行をする	-0.058	(112)	0.176*	(153)
余暇活動総合スコア	-0.153	(104)	0.279**	(136)

**p<0.01 *p<0.05

活動の種類に何らかの特徴は見られるのだろうか。

調査票には多数の余暇項目について、「あなたは余暇の時間に、次のような事柄をどの程度行ないますか」という質問があり、活動頻度がたずねられている⁷⁾。まず、この活動頻度と職業的階層志向の相関を見てみることにしよう。さらに、それぞれの項目得点を標準得点化し、項目をすべて足し合わせて余暇活動総合スコアを作成し、そのスコアと職業的階層志向の相関についても見てみることにする。表9は、余暇活動項目および余暇活動総合スコアと職業的階層志向の相関を示したものである。

表9より、男性では「海外旅行をする」との負の相関、女性では「読書をする」「ショッピングをする」「美術館、博物館に行く」「国内旅行をする」との正の相関が見られた。相関が有意であった項目とそうでなかった項目から、何らかの一貫した傾向を見出すのは難しい。だが、女性では職業的階層志向が高い人ほどいくつかの余暇活動を頻繁におこなうということは事実だろう。階層志

向的な女性は、趣味や余暇活動を重視しているだけでなく、実際に普段の活動としても階層志向が低い女性よりも積極的におこなう傾向があることが示唆された。

4.3 共同体志向

ところで、4.1 で指摘したように、男性では「社会貢献」と「人のためにつくすこと」という2つの項目と男性の職業的階層志向との間に正の相関が見られた。これらの項目は、特定の知人ではなく同じ社会に属する人びと一般につくしたいという一種の共同体志向的なニュアンスを持っているように思える。そこで、地域への愛着や国を愛する気持ちなどの共同体志向的な価値観と職業的階層志向との関係について見てみよう。表10は、「出身地域（中学3年時の居住地域）に関して、あなたはどのようにお考えですか」という質問に対する「同じ地域の出身者が、成功して有名になったらうれしいと思う」「出身地域を誇りに思う」「出身地域のために、何か役立ちたい」「出身地域が、好きである」という項目、「就職に関して、

表 10 職業的階層志向と共同体志向との相関分析

項 目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
同じ地域の出身者が、成功したらうれしいと思う	0.258*	(64)	-0.116	(72)
出身地域を誇りに思う	0.288*	(64)	0.000	(72)
出身地域のために、何か役に立ちたい	0.264*	(64)	0.034	(72)
出身地域が、好きである	0.385**	(64)	-0.097	(72)
働くなら、自分が生まれ育った地域がよい	0.209*	(126)	0.087	(166)
国を愛する気持ちは強い方だ	0.208*	(126)	0.019	(165)

**p<0.01 *p<0.05

あなたはどうかお考えですか」という質問に対する「働くなら、自分が生まれ育った地域がよい」という項目、「あなたは政治に関して、どのような態度で臨んでおられますか」という質問に対する「国を愛する気持ちは強い方だ」という項目と職業的階層志向との相関分析をおこなったものである⁸⁾。

表 10 からは、職業的階層志向と共同体志向的な価値観との有意な正の相関が男性でのみ一貫して見られる。やはり男性の職業的階層志向が高い人は、地域や社会一般に対する愛着のような共同体志向的な意識をもつ傾向があるようだ。

5 男女における職業的階層志向関連要因の違いは何に起因するのか

5.1 職業的階層志向の社会的な意味の違い

これまでの分析から、職業的階層志向と関連がある価値観に、男女で大きな違いがあるということが明らかになった。このような大きな違いは何に起因するのだろうか。ここでは希望家族モデル意識の分析結果をもとに、性別役割という観点から

考えてみよう。

表 11 は、3.1 から 3.3 までの分析結果をまとめたものである。なお、3.3 での希望夫婦就業形態意識の結果については、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業型の夫婦就業形態希望との関係で示してある。

まず、男女で正反対の結果が出ている性別役割分業型夫婦就業形態希望と職業的階層志向の関係に注目して考えてみよう。男性では職業的階層志向が高いほど従来の性別役割分業型の就業形態を希望している。一方女性では職業的階層志向が高いほど、従来の性別役割分業型の夫婦就業形態を否定して、夫婦が同じ程度働くという夫婦平等型の就業形態を希望している。この結果は、われわれの日常的な実感にも合致するように思える。だが、もう少し深く考える必要がある。

自分の職業的階層志向が高いかどうかとは関係なく、男性は、原理的には性別役割分業型夫婦就業形態と夫婦平等型就業形態のどちらを選択することもできる。したがって、男性にとってこれは選好の問題であるといえる。しかし、女性にとっ

表 11 職業的階層志向と希望家族モデル意識との関係

	男性階層志向	女性階層志向
希望家族モデル意識		
結婚希望	+	
子ども希望	+	
性別役割分業型夫婦就業形態希望	+	-

てこれは単なる選好の問題ではない。なぜなら、職業的階層志向とは自ら高い地位を目指して働くことの重視を意味する。したがって、それが高い女性は必然的に従来の「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業型夫婦就業形態を否定せざるを得ない。

表 11 のその他の結果もすべて同じ視点から理解することができる。男性では職業的階層志向が高いほど、結婚や子どもを希望する意識が高い。つまり、男性では職業的階層志向が高いほど、従来の性別役割や家族モデルを選好しているということである。これらのことから、男性の職業的階層志向とは、従来の性別役割や家族モデルというものと重なる志向であると結論付けられる。一方、女性では職業的階層志向と結婚・子ども希望意識との関連は見られない。高い階層を志向する女性は、簡単には従来の家族モデルを受け入れられないのである。

5.2 職業的階層志向と関連する価値観の意味の違い

では、家族意識を離れて、価値観一般についてはどのように考えればいいのか。2.3 および 4.1 から 4.3 までの分析によって得られたさまざまな項目と職業的階層志向との分析結果をまとめたのが表 12 である。

男性において職業的階層志向と正の関連があったのは、「社会貢献・人のため志向」「共同体志

向」である。これらの項目は、社会一般に対する愛着や共同体の重視といったある種の保守的な要素を共通に含んでいるといえるだろう。

他方、女性の職業的階層志向と正の関連があったのは、「仕事での自由度・やりがい志向」「趣味・余暇志向」「余暇活動」である。職業的階層志向が高いほど、仕事の内容についてこだわり、趣味や余暇を重視し、また実際に余暇活動を活発におこなう傾向がある。これらの項目に共通する要素は、さまざまなことが自己にとってもつ意味の重視としてまとめることができるのではないだろうか。また、趣味や余暇とは、特にやらなくてもよい活動である。したがって、それらを重視し、実際に普段からおこなっているという傾向のある種のアクティブさとして解釈することもできる。

5.3 「保守的」な男性、「元気」な女性

5.1 では職業的階層志向が男女に対して持つ社会的な意味の違いについて考察し、続く 5.2 では、職業的階層志向と関連している価値観の男女での違いをまとめた。ここではこれらの結果を総合的に解釈していくことにしよう。

男性では職業的階層志向が高いほど、社会一般への愛着や共同体志向などのある種の保守的な意識が強いという結果が得られた。この結果は、「階層志向が高い人ほど保守政党を支持する傾向があることから、階層志向が高い人ほど社会体制を正当なものとして受け入れているのではない

表 12 職業的階層志向と関連があった価値観項目の種類

		男性階層志向	女性階層志向
社会一般への愛着 ／ある種の保守性	社会貢献・人のため志向 共同体志向	+	+
自己にとっての意味の重視 ／アクティブさ	仕事での自由度・やりがい志向 趣味・余暇志向 余暇活動		+

か」と述べた片瀬一男・友枝敏雄（1990）の知見とも整合的である。

他方、女性では、職業的階層志向が高い人ほど、趣味や仕事のやりがいなどさまざまなことが自己にとってもつ意味を重視するアクティブなパーソナリティであるという結果が得られた。この結果は、「職業志向にもかかわらず、他の活動にも決してひけをとらぬ『元気な』女性たち」（山口 1998：150）であることを「性的平等支持・職業志向型」の女性の特徴として指摘する山口一男（1998、1999）の議論にも整合する⁹⁾。

では、なぜ職業的階層志向が高い女性ほど、このように「元気」であるという傾向が見られるのか。その理由を次のようには考えられないだろうか。5.1 で述べたように、女性で職業的階層志向が高い人は、必然的に従来の性別役割を強く否定せざるを得なくなる。このことは、別の言い方をすれば、職業的階層志向が高い女性ほど従来の社会的なモデルに依拠できなくなるということである。だから、社会的なモデルに依拠できない分、自己の中にこだわりをもち、自らの内的な原理にしたがって行動するような強い自己が職業的階層志向の高い女性には必要とされているのである¹⁰⁾。

もしその解釈が正しければ、職業的階層志向が

高い人ほど社会的なモデルに依拠できないことによって、社会に対する違和感のようなものが相対的に高くなっていることが予想される。そこで、このことを検討するために、最後に、社会をどのように認識しているかということにかかわる項目と職業的階層志向の関係を分析してみよう。

5.4 見えない社会的プレッシャー

前項での仮説にのっとり、社会についての認識にかかわるいくつかの項目と職業的階層志向との関係について見たものが表 13 である¹¹⁾。

表 13 の結果から、女性では職業的階層志向が高いほど、社会が不公平であるとか不条理であると認識する傾向があることが読み取れる。また、職業的階層志向が高い女性ほど、「家柄」や「親の社会的地位」、「容姿」、「処世術」、「幸運」など、本来業績主義的には正当であると認められないような項目ですら出世のためには必要であると考える傾向がある。この結果から、職業的階層志向が高い女性ほど従来の性別役割を強く否定しなければならぬために、結果的に見えない社会的プレッシャーにさらされていると解釈することは可能であろう。

本項の分析結果によって、前項での解釈の妥当性が直接裏付けられるわけではない。「従来の性

表 13 職業的階層志向と社会不公平感の相関分析表

項 目	男性階層志向	(N)	女性階層志向	(N)
不公平感スコア	-0.082	(126)	0.198*	(165)
世の中には自分の利益だけを考えている人が多い	0.112	(126)	0.233**	(166)
今の日本は、努力が報われない社会だ	-0.023	(125)	0.168*	(166)
人の幸福はある程度生まれたときにすでに決まっている	0.084	(126)	0.180*	(166)
出世要因重要度・家柄	0.135	(126)	0.248**	(165)
出世要因重要度・親の社会的地位	0.069	(126)	0.198*	(165)
出世要因重要度・容姿	0.036	(125)	0.312**	(165)
出世要因重要度・処世術	0.039	(125)	0.186*	(165)
出世要因重要度・幸運	0.076	(126)	0.166*	(165)

**p<0.01 *p<0.05

別役割モデルとの距離が大きくなることによって、その分見えない社会的プレッシャーを受けている」とか、「社会に対する違和感が高まっている分、強く自己に依拠しなければならない」といったことが、分析によって直接明らかにされたわけではないからである。相関分析によって明らかにされるのは、あくまでも各変数間の共変量にすぎない。しかし、一見ロジカルには関係のない変数との間にも仮説と整合的な関連が確認されたということには、一定の説得力があるのではないだろうか。

6 まとめ

本稿では、今までほとんど検討されてこなかった女性の職業的階層志向について、大学生調査のデータを用いて男性の職業的階層志向と比較しながら検討した。分析結果からは、職業的階層志向の高い人が抱えている意識に、男女で大きな違いがあることが明らかになった。その違いについては以下のように解釈した。

男性では職業的階層志向が高いほど従来の社会規範に同調的で、社会に貢献したいという価値観や共同体志向などの保守的な意識を持つ傾向がある。これは、男性にとっての職業的階層志向が、男性にとっての従来の性別役割と重なる志向だからである。

一方、女性では、職業的階層志向が高いほど趣味や余暇、仕事のやりがいなど、さまざまなことの自己にとってもつの意味が重視されるという傾向が見られた。女性にとって職業的階層志向とはそれ自体従来の女性の性別役割に必然的に反するものである。そのために、それが高い人ほど見えない社会的なプレッシャーを受けることになり、その分強い自己が必要とされるのである。

上のような解釈は、男性と女性の職業的階層志向が「なぜ」、「どのように」異なるのかというこ

とについての一つの仮説である。このような仮説については、今後再検討される余地は大いにあるだろう。だが、少なくとも本稿の分析は、従来の意味での「高い階層」を目指すということが、男女にとって大きく異なった意味をもつことを示唆するものである。このこと自体はわれわれの日常的感觉と照らし合わせても当たり前のことのように思える。しかし、こういった問題を男女で比較可能な形で実証的に検討しようという試みはほとんどなされていなかったのではないだろうか。神林博史（2000）が指摘するように、本稿で検討した職業的階層志向のようなアスピレーション自体もまた性別意識の一部であると考えられることができる。このように性別意識を幅広くとらえ、男女で比較可能な形に操作化して検討を加えていくことは、ジェンダーと階層の複雑な状況に対するイメージを喚起するために必要ではないだろうか。

本稿の分析で扱った学生たちが今後実際に社会に出たときにどのような社会的地位につき、どのようにその価値観を変化させるかということは定かではない。また、特定の大学の学生を対象としていることによるデータの特殊性は考慮すべきであろう。今後多様な調査によってこの問題が検討されることを望む。

〔注〕

- 1) 本稿では、これ以後「階層志向」のことを「職業的階層志向」とよぶことにする。これは、女性に対して「階層志向」という用語を用いることで生じる概念的な混乱を避けるためである。「女性の階層志向」という表現には二つの異なった意味が生じてしまう。一つは、女性が自ら働くことによって、男性に対して想定されてきたのと同じ階層スケール上での達成を目指す志向、もう一つは、世帯としての階層的達成を目指す志向である。後者には前者の意味だけでなく、男性に対しては想定されないような、いわゆる「玉の輿」的な志向も含まれてしまうことになる。

このような混乱が生じる理由は、階層論が階層の単位を家族で考えてきたことと、その家族の世帯員の社会的地位は男性の世帯主によって代表されると考えてきたことにかかわっている。詳しくは、J. Acker (1973) の問題提起にはじまる一連の議論 (Goldthorpe 1983, 1984, Heath and Britten 1984, Stanworth 1984 など) および、岡本英雄 (1990)、盛山 (1994)、原純輔・盛山和夫 (1999)、盛山 (2000) などを参照せよ。

2) この調査の調査対象者は、同志社大学文学部社会科学科社会学専攻生および社会学部社会学科生全員であり、調査方法は必修科目やゼミなどの講義を利用した質問紙法の集合調査である。調査対象者は 389 人、有効回答者数は 299 人、回収率は 76.9%。調査内容の詳細やデータの基礎集計などについては同志社大学の 2005 年度の調査報告書 (小林編 2006) を参照のこと。

3) 特定の大学の学生を対象としたデータには、当然さまざまな偏りがあるということが予想される。だが分析の目的は、データ内の職業的階層志向の分布それ自体を明らかにすることではない。職業的階層志向が高いほどどのような意識をもつ傾向があるのかを明らかにすることが本稿の分析目的である。したがって、婚姻や就業の影響を受けずに、同じ大学に通っている学生であるという共通条件のもとで分析できるという点が、このデータを使用することのメリットである。

もちろん同じ大学の男女であっても、出身階層によって意識のありようが異なるということは想定しうる。そこで、本稿の分析結果に対する出身階層の影響について検討するために、「自分の家族は金銭的にゆとりがある方だ」という意識項目や、「父学歴」、「母学歴」、「奨学金」などの変数でコントロールした偏相関分析もおこなってみた。しかし、5.4 の分析のように出身階層とロジカルな関連が想定されるものも含めて、分析結果の解釈に大きな修正を要求されるような結果は得られなかった。また、別の大学の (女子) 大学生調査データを用いて性別役割意識について検討した中井美樹 (2000) も、「性別役割分業意識と関連が見られるといわれている階層要因との明瞭な関連は必ずしもみとめられなかった」と述べ、その原因として、(一つの大学の調査であることから) 「対象学生の出身層の分散があまり大きくないため」かもしれないと述べている (中井 2000: 124-125)。以上のことから、本稿では出身階層の影響はないという前提のもとに分析を進めていくこと

にする。

4) 職業的階層志向尺度を構成するために使用した変数の平均値と標準偏差は以下のとおりである (「重要である」1 点~「重要ではない」5 点)。「高い収入を得ること」の平均値は、男 2.07、女 2.02、標準偏差は、男 1.11、女 0.89。「高い地位につくこと」の平均値は、男 2.83、女 2.93、標準偏差は男 1.28、女 1.05。「社会的評価の高い職業につくこと」の平均値は、男 2.74、女 2.47、標準偏差は、男 1.35、女 0.92。これらのうち、男女の平均値の差が有意であったものは、「社会的評価の高い職業につくこと」のみである (5% 水準)。

また、上記の変数を反転させたものを用いて構成した職業的階層志向尺度の平均値は、男 -0.05、女 0.02、標準偏差は男 1.16、女 0.86 であり、男女の平均値の差は有意ではなかった。

5) 相関分析をおこなうにあたって、常動志向をはかるために使用した項目には「そう思う」~「そう思わない」までの 5 段階の評価に、常動志向に対して肯定的な回答ほど点数が高くなるように、それぞれ 5 点から 1 点を与えた。なお、今後特に表記しないが、以後の分析においても、変数の意味に応じて同様の手続きをおこなうことにする。

6) 「その他」は分析からは除外した。また、「妻のみ働く」、「妻が主に働く」を選んだ人は少なく、これらのカテゴリーでは期待値が 5 を下回るため、この表の χ^2 値はこれらのカテゴリーを省いて計算した。

7) 本稿の分析で用いる量的変数の中で、この質問項目のみ、5 段階評価ではなく数字を直接記入してもらった回答形式をとっている。具体的には「ゲームをする」や「音楽を聴く」に対しては、週に何時間それをおこなっているか、「読書をする」に対しては月に何冊買っているかといった形でそれぞれ答えてもらっている。

なお、「マンガを読む」(平均 3.97 標準偏差 6.47) において、100 という大幅なはずれ値が 1 ケース (男性) あったので欠損値として処理した。

8) 表 10 の上 4 つの項目は、現住地と中学 3 年生における居住地が異なる人にのみ答えてもらっているジャンプ項目であるため、N が大幅に少なくなっている。

9) 山口は、性別役割意識にかかわる変数をもとに、女性について「性別役割支持型」「性的平等支持・職業志向型」「性的平等支持・非職業志向型」の 3 つの潜在クラスを析出した。そして、それら 3 つの潜在クラスと社会階層、職歴およびライフ

スタイルとの関連について多項ロジット潜在クラス回帰分析を用いて分析した。その中で、山口が「性的平等支持・職業志向型」の特徴としてあげる「仕事も趣味もともに追求する型であり」「できれば仕事ばかりか、家庭も私生活も大事にしたい女性たち」(山口 1998: 150) というイメージは、余暇や趣味、仕事のやりがいを重視し、多様な余暇活動を実際におこなう本稿での職業的階層志向の高い女性たちと大いに重なる部分があるように思える。実際、本稿で扱ったような職業的階層志向が高い大学生の女性が社会に出た場合に、「性的平等支持・職業志向型」の女性となる可能性は高いと考えられるであろう。

- 10) 女性の職業的階層志向についてのここでの仮説は、D. リースマン (1950=64) の有名な「内部指向型」の人間類型を思い出してもらえばイメージしやすい。

「内部指向型」の人間とは、社会において「既存のきまりによって予断することをゆるさない性質」(リースマン 1950=64: 12) の「まったくあたらしい種類の状況がたくさん出現」(同: 12) したことから、「厳密かつ自明の伝統指向にたよらずに、社会的に生きてゆくことのできる性格」(同: 12) として社会的に必要となった社会的性格である。予断をゆるさない性質の状況に対応するためには、「剛直でしかも個性化された性格によって解決されねばならない」(同: 12) ために、「個人の方向づけの起動力になるものが“内的”」(同:

12) である必要があるのである。

職業的階層志向が高い女性ほど、厳密かつ自明の従来の性役割に頼ることはできない。だから、趣味や仕事のやりがいへのこだわりのような、自己の内的な原理を強く持たざるをえないのである。

- 11) 「不公平感スコア」は、「あなたは今の日本社会に次のような不公平があると思いますか」という質問に対する「性別」「学歴」「職業」「所得」「資産」の項目を、主成分分析を用いて尺度化したものである。第1主成分に対して全変数が高く負荷したため、その主成分得点を用いている。この主成分の固有値は2.700、サンプル数は296であり、基準値として用いられることのある固有値1を超える主成分はこのほかに存在しなかった。

表13で使用している他の項目と質問文との対応関係は以下のとおりである。「あなたは、現在とこれからの社会についてどのようにお考えですか」に対する「世の中には自分の利益だけを考えている人が多い」、「あなたは、日本社会がどれくらい公平な社会だとお考えですか」に対する「今の日本は、努力が報われない社会だ」、「あなたは、これからの自分や生き方についてどのようにお考えですか」に対する「人の幸福はある程度生まれたときにすでに決まっている」。下の4つの「出世要因重要度」は、「あなたは、次のような事柄は出世のためにどの程度重要だと思いますか」という質問に対する項目である。

【参考文献】

- Acker, Joan, 1973, "Women and Social Stratification: A Case of Intellectual Sexism," *American Journal of Sociology*, vol. 78 (4): 936-45.
- 元治恵子, 2004, 「女子高校生の職業アスピレーションの構造——専門職と女性職」『応用社会学研究』46: 67-76.
- Goldthorpe, John, 1983, "Women and Class Analysis: In Defence of the Conventional View," *Sociology*, vol. 17(4): 465-88.
- , 1984, "Women and Class Analysis: A Reply to the Replies," *Sociology*, vol. 18(4): 491-9.
- 原純輔・盛山和夫, 1999, 『社会階層——豊かさの中の不平等』東京大学出版会.
- Heath, Anthony and Nicky Britten, 1984, "Women's Jobs do make a Difference: A Reply to Goldthorpe," *Sociology*, vol. 18 (4): 475-90.
- 今田高俊, 2000, 「ポストモダン時代の社会階層」同編『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東京大学出版会.
- 井上寛, 2000, 「脱一階層志向の状況と構造」今田高俊編『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東京大学出版会.
- 門脇厚司, 1978, 『現代の出世観——高学歴化でどう変わったか』日本経済新聞社.
- 神林博史, 2000, 「日本における性役割意識研究の動向と課題」『社会学研究』68: 147-68.
- 片瀬一男, 1988, 「社会階層と価値志向——ライフスタイルにおける階層志向と私生活志向」1985年社会階層と社会移

- 動全国調査委員会編『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第2巻——階層意識の動態』。
- 片瀬一男, 1997, 「美貌という戦略——女子大学生の就職活動における業績性と女性性」『社会学年報』26: 171-94.
- 片瀬一男・友枝敏雄, 1990, 「価値意識——社会階層をめぐる価値志向の現在」原純輔編『現代日本の階層構造 第2巻——階層意識の動態』東京大学出版会.
- 小林久高編, 2006, 『同志社大学社会調査実習報告書 14』(第1分冊)同志社大学社会学科.
- 中井美樹, 2000, 「若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観」『立命館産業社会論集』36(3): 117-27.
- 中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラック』東洋館出版社.
- 中山慶子, 1985, 「女性の職業アスピレーション——その背景, 構成要素, ライフコースとの関連」『教育社会学研究』40: 65-86.
- 岡本英雄, 1990, 「序論——女性と社会階層研究の展開」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造 第4巻——女性と社会階層』東京大学出版会.
- Riesman, David, 1950, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, Yale University Press. (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房.)
- 盛山和夫, 1994, 「階層研究における『女性問題』」, 『理論と方法』9(2): 111-26.
- , 2000, 「ジェンダーと階層の歴史と論理」同編『日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会.
- Stanworth, Michelle, 1984, “Women and Class Analysis: A Reply to John Goldthorpe,” *Sociology*, vol. 18(2): 159-70.
- 山口一男, 1998, 「女性における性別役割意識と社会階層, 職歴, ライフスタイルとの関連」佐藤嘉倫編『社会移動とキャリア分析』(1995年SSM調査シリーズ3)1995年SSM調査研究会.
- , 1999, 「既婚女性の性別役割意識と社会階層——日本と米国の共通性と異質性について」『社会学評論』50(2): 231-52.
- 安田三郎, 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会.
- 吉原恵子, 1995, 「女子大学生における職業選択のメカニズム——女性内分化の要因としての女性性」『教育社会学研究』57: 107-24.